

# 公立 A 幼稚園において外国籍の3人の子どもは どのように園生活に馴染んでいるのか

— うえの式質的分析法によるフィールドノーツの分析をもとに —

李 睿苗・石井佳奈子・朴 聖希<sup>1</sup>  
小川佳万・中坪史典・小野寺香<sup>1</sup>

(2024年10月9日受理)

How are the Three Foreign Children Adapting to Life at Public Kindergarten A?:  
An Analysis of Field Notes Based on Ueno's Qualitative Analysis

Ruimiao Li, Kanako Ishii, Sunghee Park<sup>1</sup>,  
Yoshikazu Ogawa, Fuminori Nakatsubo and Kaori Onodera<sup>1</sup>

**Abstract:** The aim of this study was to observe three children of different nationalities to determine how they fit into preschool life in Japan, and to examine what is associated with the adaptation of young children with foreign links to a Japanese preschool. Fieldwork was conducted in one class in public kindergarten A, where there are relatively few cases of enrollment by foreign-linked children. The fieldnotes were then analyzed using Ueno's qualitative analysis. The results revealed the ways in which foreign-linked children become adapted to life at kindergarten A. They were not uniform, but rather varied from child to child. However, while all three children did adapt, there were also situations in which they did not seem to be fully adjusted to life at the school. For example, A-kun often showed signs of being concerned about his surroundings, while B-kun sometimes had problems with his friends, due to his unfamiliarity with Japanese customs. The background to their adapting to kindergarten life is thought to be related to three factors: the atmosphere of the school itself, the relationships with their caregivers and other children, and the play environment. In addition, by using Ueno's methods to analyze the fieldnotes subjectively, it was possible to bring to light points that had not previously been made fully clear at the time of the observation and to depict latent contexts and events in the children's lives. It is significant that this study showed how observational data can be analyzed using Ueno's approach.

Key words: Foreign Children, Preschool Life, Adaptation, Ueno's Qualitative Analysis,  
Fieldnotes.

キーワード：外国籍の子ども，園生活，馴染む，うえの式質的分析法，フィールドノーツ

## 1. 問題と目的

### 1.1 問題背景

「外国籍」や「外国人」といった概念で捉えきれな

い子どもや家族が急増している現代において、多文化社会への適応は保育の現場でも喫緊の課題である。現代日本における多文化保育の理想は、「外国人児童に対して日本の文化に適応させる保育ではなく、多様性を育むことを大切に保育」と認識され（品川2011）、就学前教育・保育の指針である「保育所保育

<sup>1</sup>奈良女子大学人間文化総合科学研究科

指針」 「幼稚園教育要領」 「認定こども園教育・保育要領」でも、多文化保育を推進するために保育者は子どものもつ文化的背景を理解することが重要であると提唱されている。

そもそも多文化か否かにかかわらず、多くの子どもたちにとって園ははじめての集団生活の場であり、そこでの経験は小学校以降の生活にもつながるものである。大野（2010）は、インタビュー調査を通して、保育者は生活習慣の確立や幼稚園に馴染むことで、子ども同士の関わりが成り立つと考えていることを指摘した。その際に、大野は「楽しく」通園することを園に馴染むと表現している。「馴染む」と類似している語として「適応」があるが、真嶋ら（2017）は、関連文献の整理を通して幼児の園への適応を「幼児と環境との相互作用により、幼児が心理的な安定を得ながら、環境との適切な関係を構築すること」と捉えた。大野の「馴染む」の捉え方と真嶋らの「適応」の定義を整理すると、「馴染む」は子どもが園生活を心理的に安定した状態で過ごしていることを指し、「適応」はそれを踏まえて他者と関係を構築することをまでを射程に入れた語であるといえる。そして、「馴染む」や「適応」は保育の現場においてキーワードの一つであるといえ、これから多文化保育においても活発に議論すべきテーマであると言えるだろう。

## 1.2 先行研究の検討

上述のように多文化化の急速な進行を反映して、近年は外国につながる幼児の保育現場での様相を、質的に描き出そうとする研究も増えている。先行研究を概観すると、その数は限られているものの、外国につながる幼児たちが園生活に「馴染む」「適応」する過程を分析する研究も行われている。例えば李・浜田（2021）は、外国人園児の受入れ経験の少ない散在地域の公立幼稚園において中国人の3歳児2人の参与観察を行い、幼稚園生活への適応について、日本語と母語である中国語の発話産出過程に焦点をあてて明らかにしている。また、浅川・山内（2020）は、ある幼稚園の中国人5歳児の観察と保育者へのインタビューを通して、日本語が未習得のまま日本の幼稚園に入園した中国人幼児の園生活への適応プロセスについて考察している。さらに佐々木（2015）は、外国人人口比率が日本一高い群馬県大泉町の、公立保育園の3歳児クラスで観察を行い、ブラジル国籍の外国籍児と南米系外国籍保育士との関係づくりによってもたらされる心理的效果と、それによる保育園への適応過程について考察している。また外国につながる幼児を対象とした質的研究に射程を広げると、長江（2023）は文化的多

様性のある保育園の異年齢保育に注目し、園児の参与観察と保育者へのインタビューを通して、異年齢保育のなかで文化や言語的差異が多様性のうちに包摂される様相などを描き出している。さらに黄ほか（2018）は、中華系外国人学校附属の幼稚部5歳児クラス、幼児8名の自然会話場面の観察を通して、幼児は文の切り替えで、二言語を交互に使いながら会話していることや、相手の得意言語に合わせて言語を使用することなどを明らかにしている。

以上のように、外国につながる幼児を対象とした質的研究がいくつか行われてきたが、これらから次の二つの傾向が指摘できる。1つは、長江（2023）、佐々木（2015）のように多文化化が進行した地域の保育現場での調査研究が進められてきたことである。もう1つは、李・浜田（2021）、黄ほか（2018）のように、同じ国や地域につながりをもつ幼児を対象を限定して、調査研究が行われてきたことである。その一方で、外国につながる幼児の受入れ事例が少ない園で、クラスに複数の国・地域の子どもがいる場合について、彼／彼女らが園生活にどのように「馴染む」のか、あるいは「適応」していくのか、質的に分析した研究は管見の限り見当たらない。

## 1.3 研究目的と意義

以上を踏まえ、本研究は、外国につながる幼児の受入れ事例が比較的少ない公立A幼稚園の一つのクラスにおいて、3人の異なる国籍の子どもがどのように園生活に馴染んでいるのかを明らかにすることを目的とする。そのうえで、外国につながる幼児が園へ「馴染む」こと背景には、何が関連しているのかを検討する。

また本研究の意義について述べる。日本全国を見渡すと、外国につながる人々が多く住む地域に位置する保育施設もある一方で、現時点では外国につながる幼児が少ない、あるいはいない保育施設も少なくないだろう。しかし今後、全国的に外国につながる幼児がますます増加していくことが予想され、多文化保育に取り組もうとする保育現場も多いと予想できる。そこで本研究では、これまで外国につながる幼児の受入れ事例が比較的少なかった幼稚園で、当該年度に複数の外国籍幼児が1つのクラスで園生活を送るようになった事例に注目する。それにより、幼稚園側の多文化保育に関するノウハウの蓄積が少ないなかで、園や保育者がどのように保育環境を作り、多様な背景をもつ幼児を支援することができるのか、具体的な示唆や課題を提起できると考えられる。

## 2. 方法

### 2.1 研究協力園のプロフィール及び選定理由

本研究では、広島県内に位置する公立幼稚園である A 園を研究協力園とする。2024年 3 月の時点で、A 園は 2 つのクラスを有し、在籍している園児の数が年長児クラス 28 人、年中児クラス 16 人である。A 園を研究協力園とする理由は、2 点がある。まず、1 つの園だけでは日本の幼児教育を代表することはできないものの、公立幼稚園という点で、A 園が日本の幼稚園に共通する特徴を多数持っていることである。また、A 園には、3 人の外国籍の子どもが在籍していることである。この 2 つのことから、日本の保育実践における多文化保育の現状を理解する上で A 園にアプローチするのが適切だと考え、本研究の研究協力園とした。

### 2.2 3 人の外国籍の子どものプロフィール

本研究では、上記の A 園に在籍していた 3 人の外国籍の子どもを中心に観察を行った。3 人の外国籍の子どものプロフィールは以下の表 1 で示している。表 1 で示した通り、3 人の外国籍の子どもはそれぞれインドネシア、シリア、ミャンマー出身であり、A くと B くんが男の子、C ちゃんが女の子で、3 人とも年長クラスに在籍している。3 人の子どもの入園時期が異なるため、観察開始時の 3 人の子どもの在園期間もそれぞれ異なり、A くんは 8 ヶ月、B くんは 1 年 9 ヶ月、C ちゃんは 2 ヶ月である。

表 1 A 園の外国籍の子どもの属性

	性別	クラス	国籍	入園時期
A くん	男	年長	インドネシア	2023年5月
B くん	男	年長	シリア	2022年4月
C ちゃん	女	年長	ミャンマー	2023年11月

### 2.3 A 園におけるフィールドワーク

データ収集にあたっては、2024年の 1 月から 3 月にかけて週に 1 回の頻度で合計 8 回の観察を実施した。観察は子どもが登園する 9 時頃から開始し、11 時 30 分までのおよそ 2.5 時間、8 回の観察で合計 20 時間実施した。観察する際に、できる限り子どもの遊びと現場の保育を壊さないようにするため「消極的な参与 (passive participation)」(柴山 2006) の立場に立って観察を行った。また、観察者は 2 名おり、教育学を専門とする日本人と中国人留学生の大学院生 1 名ずつである。2 人が共に実施した参与観察は最初の 2 回であり、それ以降の 6 回は中国人留学生の観察者が行った。

### 2.4 データ分析

本研究では、うえの式質的分析法をデータ分析方法として採用する。うえの式質的分析法とは、質的データ分析手法であり、上野千鶴子によって開発された KJ 法の発展型である (上野 2017)。うえの式質的分析法における情報加工は (1) 情報を脱文脈化したあとに、(2) 再文脈化するプロセスを指す。このようなプロセス、とりわけ脱文脈化 (情報のユニット化) によって、脈絡のない情報の中に、隠れた文脈を事後的に発見することで、徹底的にデータに語らせる (上野・一宮・茶園 2017) ことができる。本研究では、公立 A 幼稚園において 3 人の外国籍の子どもの園生活に着目したが、日本の公立幼稚園における外国籍の子どもの園生活への適応の状況に関する知見を一般化することを目的とするのではなく、A 園が多文化保育を行っている園の一つの典型として捉え、その実際を描き出すことを目指している。それを踏まえ本研究では、「データに語らせる」という利点を活かして、観察データをより深く理解することができるうえの式質的分析法を採用することとした。

### 2.5 分析手続き

上野・一宮・茶園 (2017)、上野 (2018) に基づき、以下の手順で分析を行った。(1) まず、情報のユニット化である。フィールドノーツ (表 2 左列参照) を脱文脈化し、情報のユニットカード (表 2 右列参照) を作成した。「1 カード 1 情報」の原則を守り、発言の持ち味を活かして簡潔・明瞭にやさしい言葉でカード作成の作業を行った (表 2 参照)。(2) そして、ランダムで 1 枚のカードを抽出し、別のカードと意味は「同じか違うか」を直感で判断し、「違うなら分ける」、「似ているならまとめる」という手順を繰り返してカードのグルーピングを行った。(3) また、できたグループの中にある複数の情報ユニットの共通点を言語化し、表札を作成するカテゴリ化をした。表札はテーマや

表 2 うえの式カードの作成

フィールドノーツ	うえの式カード
太鼓の練習時、ゴソゴソする子どもを見て「かっこいいってどういうのだったけ？」と問いかけ	問いかけにより保育者にとって望ましい行動を促す
朝登園時、雪が降って元々朝の会の時間に子どもが外遊びを始めた。朝の会少し遅れて開始。	自然物を重視した保育 状況にあわせた柔軟なスケジュール
A くんともう 1 人の子どもと一緒にこま回しを遊んでいたが、途中で別の遊びに行き、他の子どもと遊び始めた。どっちでも長く続いている	色々な人と広く浅く関わる A くん
A くんは色々なことを試してすぐ諦めてしまった	1 つの遊びに集中していない A くん

キーワードではなく、必ず独立して意味のあるメッセージにならなくてはならない。グルーピングとカテゴリ化において、ただ1枚のカードで、どこにも属さないはみ出すものは無理やりどこかに入れず、対応する1枚の表札を作る(上野・一宮・茶園 2017)。うえの式質的分析法では、一次情報のユニット数が多くても少なくとも、メタ情報の数がほぼ一定数に収まり、一次情報を追加してもそれ以上メタ情報の数が増えない状態を「カテゴリー飽和」と呼んでいる(上野・一宮・茶園 2017)。「カテゴリー飽和」に達すれば、サンプル数は当該の調査対象についてはほぼ適切であると言える根拠になっている(上野 2018)と言われ、本研究では執筆者全員が「カテゴリー飽和」に達したと認めた上で、カテゴリー化を終えた。(4)次に、メタカードの数はそれぞれ、違うものは遠く、似ているものは近くに置いてマッピング化した。(5)最後に、「因果関係」「相関関係」「対立関係」を表す矢印でグループを繋ぎ、チャート化した。以上(1)～(5)の手順を経て作成したチャート図は、図1の通りである。その後、全てのメタ情報を必ず1回以上に使い、必要に応じてうえの式カードを言及し、全てのメタ情報間につながりを作るというルールに従いストーリーテリングを作成した。

## 2.6 倫理的配慮

本研究は、研究協力園A園に研究目的と内容を説明し、フィールドワークとそれに基づく研究について同意を得た。

## 3. 結果と考察

### 3.1 「みんな一緒に求める保育」が行われているA園の雰囲気

今回観察した園は共通の工作の製作が求められており、制作物が完成していない子は自由保育の時間でつくるというようなみんな一緒に求める保育が行われている。しかしその一方で介入の少ない室内での自由遊びや先生は子どものやりたいことをサポートするなど子ども中心の保育の現れも見られる。(中略)カリキュラムのなかでは英語のあいさつの歌を一緒に歌ったりフィリピン出身の先生が英語を教えに園に来たりとやさしい英語を取り入れた保育が行われており「英語で遊ぼう」時間では一定程度の英語の知識が求められている。

A幼稚園は公立幼稚園として、一つの園だけでは日本の幼稚園を代表することができない。しかしその

一方で、ナショナル・カリキュラムに基づいて子どもの園内生活の1日のスケジュールを組むような公的な幼児教育施設である、日本の幼児教育の特徴を見ることができるのではないかと考えた。観察により、A園では設定保育の時間が子どもの自由遊びの時間より長く、共通の工作の製作が求められており、制作物が完成していない子は自由保育の時間でつくるというようなみんな一緒に求める保育が行われている。このような時間は外国籍の子どもにとって集団と関わる時間として外国籍の子どもが日本の園生活に馴染ませる一環と扱うことができる一方、外国籍の子どもが自由に園で探索し、主体的に周囲と関わることができなくなることも懸念されている。

### 3.2 「みんな」のことを意識しながら自身の遊びを模索しているAくん

ほかにも積極的に先生とかかわる外国籍の子どもの姿が見られた。例えばAくんはコマ回しができたことを先生に自慢する様子がみられた。Aくんは、得意なことを友達に教えたり、みんなと楽しくサッカーをするなど、先生だけでなく積極的に友達とかかわっている。また、Aくんは色々な子をキョロキョロ観察したり、遊びの途中でよく外を眺めたりと、周りの人が気になる姿がみられた。と同時に、Aくんは色々な人とかかわりたいと思っている。例えば、観察者はいろいろな子どもと浅く広く関わる姿を見て、Aくんは人と関わるのが好きそうだと感じた。このようにいろんな友達とかかわりたいと同時に、積極的に先生とかかわりたい姿も見られた。その一方で、一人で絵本をよんだり、コマに興味があったりとひとり遊びに興味がある姿も見られた。他にも遊びを長く続けていたり、遊びに魅力を感じる場面も観察できた。しかし、遊びに入り込めない様子もAくんは観察者に見せていた。例えば、一つの遊びに集中していなかったり、遊びに対して躊躇しがちな様子が見られた。

Aくんは観察者が幼稚園での観察を始めた時点で、入園して約8か月が経っていた。Aくんは友達や先生と積極的に関わろうとし、サッカーのような集団遊びにも参加している。一方、一人で絵本をよんだり、コマに興味があったりとひとり遊びに興味がある姿も見られ、集団遊び・ひとり遊びに関わらず、自分の好きな遊びに取り組んでいた。それは、Aくんが日本の幼稚園生活に慣れ、それが安定してきていることを示していると考えられる。一方で、Aくんは時に、

公立 A 幼稚園において外国籍の 3 人の子どもはどのように園生活に馴染んでいるのか  
 —うえの式質的分析法によるフィールドノーツの分析をもとに—

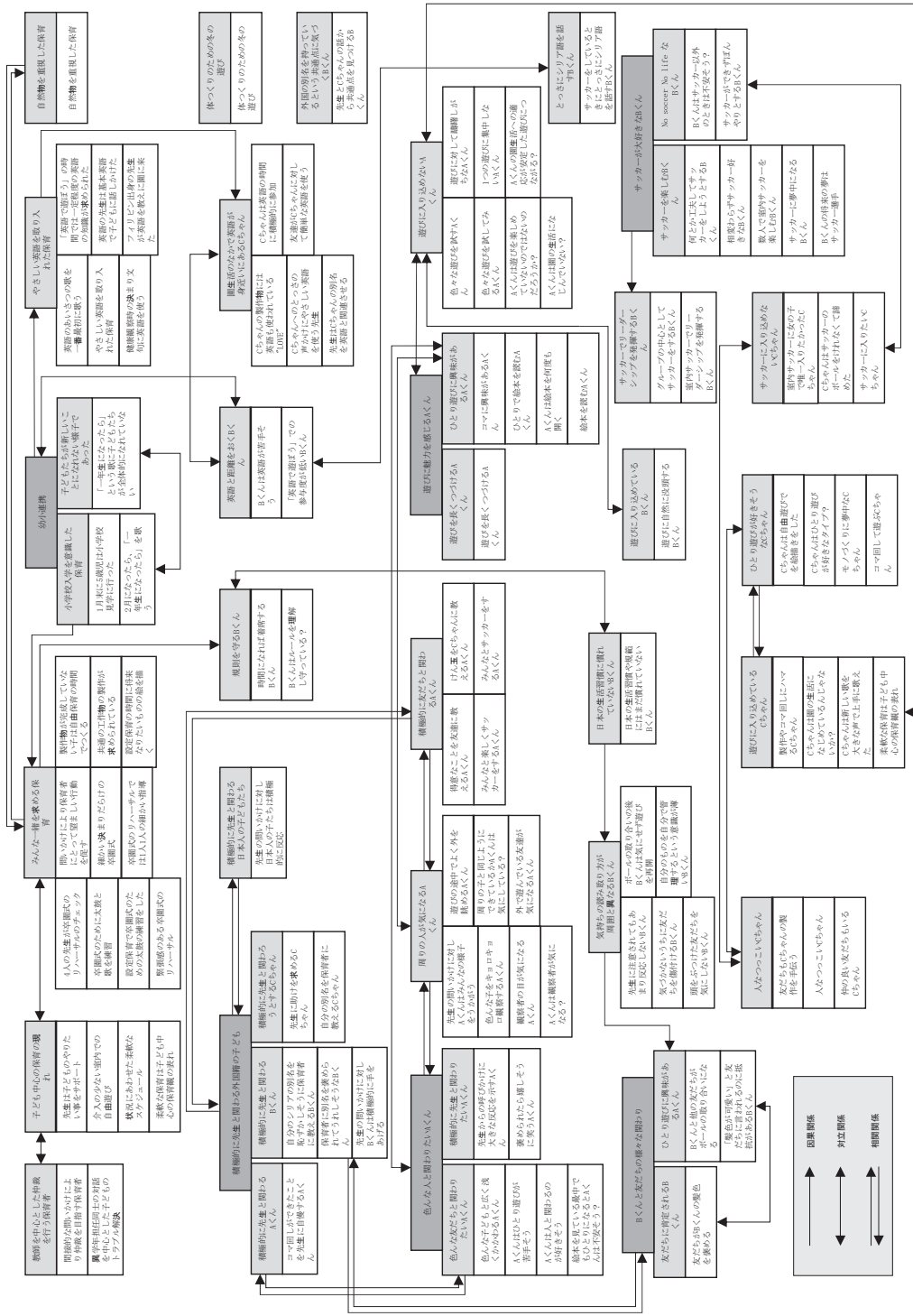


図1 うえの式質的分析法のチャート図

色んな子をキョロキョロ観察したり、遊びの途中でよく外を眺めたりと、周りの人が気になる姿もみられ、また、遊びに入り込めずに、一つの遊びに集中していなかったり、遊びに対して躊躇しがちな様子も見られた。

Aくんのひとり遊びは、Coplan (2000) が提唱する非社会的遊びに当てはまるだろう。非社会的遊びとは、他の遊び相手となる可能性のある人がいる中で、単独で活動や行動を見せることである (Coplan, 2000)。Coplan (2000) は非社会的遊びを「沈黙行動 (reticent behavior)」「ひとり静的行動 (solitary-passive behavior)」「ひとり動的行動 (solitary-active behavior)」の3つに分類しているが、そのうち、Aくんの様子は「ひとり静的行動」と「沈黙行動」に当てはまると考えられる。一つ目の「ひとり静的行動」は、絵を描いたり積み木を組み立てたり物事について調べたりするといった、構成的遊びと探索的遊びで構成される遊びであり (Coplan, 2000)、Aくんの場合、コマ回しなどが当てはまる。もう一つの、「沈黙行動」には、傍観者の行動 (onlooking behavior) と何もしない行動 (being unoccupied) があり、これらの沈黙行動には社会的状況における社会的恐怖や不安が反映されていると考えられている (Coplan, 2000)。その一方で、沈黙行動はそうした内面的な不安に関連があるだけでなく、大内・桜井 (2005) の調査分析では、沈黙行動の多い子どもは、協同・従順な傾向にあったことが示されている。Aくんの場合、周囲の教師や子どもたちと積極的に遊ぶ様子もみられたことから、大内・桜井 (2005) が提示するように、Aくんは協動的であるために、他の子どもたちや教師の様子を気にするあまり、その場の遊びに集中していないように見えることが度々あったのかもしれない。

以上を踏まえると、みんな一緒に求める場面のある保育環境のなかで、Aくんは自由に遊んでよい自由保育の時間であっても、周囲の「みんな」のことを意識してしまうことがあったのではないだろうか。さらに言えば、AくんはA園での生活に馴染もうとする過程で、周りの様子を伺いながらAくん自身の遊びや振る舞いを模索していることが考えられ、それゆえに、周囲を観察する姿や一つの遊びに集中しない姿が見られたのだと考えられる。

### 3.3 「みんな」と関わる中で様々な葛藤をするとともにサッカーに夢中で自己発揮しているBくん

B君は英語が苦手そうで、「英語で遊ぼう」への参加度が低いなど、英語と距離をおいている。し

かし、Bくんはサッカーをしているときにとっさにシリア語を話すこともある。みんな一緒に求める保育が行われているため、Bくんは規則を守っている。例えば、時間になれば着席する様子が見られた。しかし、Bくんは日本の生活習慣に慣れていない様子も見られるため、気持ちの読み取り方が周囲と異なることもあり (中略) また、Bくんは自分の物を自分で管理するという意識が薄いかもしれない。なので、Bくんと友達の手揉めごともしきる。その一方で、友達に肯定される場面も見られた。このようにBくんは友達と様々なかかわりをしている。それと同時に、自分のシリアの別名を恥ずかしそうに保育者に教えたり、先生の問いかけに対し積極的に手を挙げるなど、積極的に先生ともかかわっている。(中略) Bくんはサッカーが大好きとしたり、サッカー以外の時は不安そうな様子が見られるなど、No Soccer No Life な様子が見られた。また、何とか工夫してサッカーをしようとしていたり、将来の夢はサッカー選手などサッカーを楽しんでいた。このように、Bくんはサッカーが大好きなので、サッカーでリーダーシップを発揮することもある。

Bくんはみんな一緒に求める保育の中で、設定保育の時間においてルールを守りながらも、日本の生活習慣に慣れていなかったり、気持ちの取り方が周囲と異なることで友達との揉め事も起こったりしていた。また、Bくんは外国籍の子どもであるため、自分の母語を無意識的に口に出していたが、園内でみんなが集まって英語を一緒に習う際に、あまり英語が上手ではないようで、英語と距離を置いているように見えた。

その一方で、サッカーがないとほんやりとし、サッカーに夢中になっているBくんの様子が見られた。中坪ら (2010) は幼児の遊びの質を捉える際に、Laevers (2005) が提示する幼児の「夢中度」に関する評価尺度 (The Scale for Involvement) を採用している。「夢中度」とは、「子どもがどのぐらい活動に没頭しているのか」を見るものである。「夢中度」については、活動に対して子どもが没頭し、心を奪われ、全能力が向けられ、最大限の力を発揮しようとする状態のことであり、そこで子どもの集中力は最高に達すると言われる。Bくんの場合はサッカー以外のことにあまり関心を示していないのに対し、サッカーにより保育者に支えられ、友達とのチームワークを通して主体的に自らの力を発揮し、存分に幼稚園にいる時間を楽しんでいるように見えた。みんな一緒に求める保育の中でも、Bくんは高度な主体性を持ち、自分の興

味に従ってサッカーに全身全霊に取り組んで自己発揮ができ、園生活に馴染んでいるのではないだろうか。

### 3.4 ひとり遊びに自然に没頭できると同時に「みんな」とも積極的に関わる C ちゃん

園生活のなかで英語が身近にあり、C ちゃんの製作物には英語も使われていたり、先生は C ちゃんの別名を英語と関連させたりもしている。同じ外国籍の子どもでも B くと C ちゃんは遊びに自然に没頭し、遊びに入りこめている。特に C ちゃんは製作やコマ回しにハマり、園の生活に馴染めているのではないかと感じる場面が多かった。また、C ちゃんは自由遊びでお絵かきをしたり、モノづくりに夢中になったりするなど、ひとり遊びが好きそうであった。しかし、友達が C ちゃんの製作を手伝ったり、仲の良い友達もいることから、C ちゃんは人懐っこい性格の持ち主でもある。そのため、積極的に先生とかかわろうとしている様子もしばしば見られた。(中略) 人懐っこい C ちゃんだが、サッカーをしようとしたとき、サッカーのボールを蹴れなくて、サッカーに入り込めない場面もあった。

B くと同様、C ちゃんも遊びに自然に没頭し、遊びに入りこめている様子が観察されている。C ちゃんの場合は、自由遊びの時間にお絵描きをしたり、モノづくりに夢中になるなどひとり遊びが好きな様子が、多々観察されている。ただ、C ちゃんの場合は B くと異なり、製作物に「I Love You」といった英語を書いたり、先生と自身の別名について英語と関連しているかをおしゃべりしたりと、英語を身近に感じているようであった。

また、製作の場面では、友達が C ちゃんを手伝う様子もみられ、それに対し C ちゃんも友達を拒絶したりせず、一緒に製作を楽しんでいた。このように C ちゃんは、ひとり遊びが好きな一方で、人懐っこい性格の持ち主であり、他の子と一緒に遊ぶ様子も多くみられている。もちろん、園生活においては、みんなでサッカーをしようとしたとき、C ちゃんはサッカーのボールを蹴れなくて、サッカーに入り込めないといった場面も観察されたが、その場面においてもその後別の遊びに切り替えている様子が見られている。

C ちゃんのひとり遊びは、先述の Coplan (2000) の提唱する非社会的遊びのうちの静的遊びに分類できるだろう。大内・桜井 (2005) は、ひとり静的行動について全体では社会的適応について影響がみられなかったとしている一方で、女兒に限れば、ひとり静的

あそびが多い子どもは無関心・引込み思案である傾向がみられたとしている。しかし、C ちゃん場合はひとり遊びに夢中になる場面も多く見られた一方で、仲のいい友達と遊んだり積極的に先生とかかわろうとしており、周囲に対しての無関心さや引込み思案な様子はうかがえなかった。田窪・堀越 (2012) は、子どもが「ひとりで過ごす時間をもつことで、気持ちの切り替えや立て直しができること、十分にひとり遊びを行うことによって、いずれ自発的に遊び出す」様子が見られたことを指摘しており、入園して 3.4 か月程度の C ちゃんの場合も園生活に馴染むうえで、ひとり遊びが心の安定につながり、先生や友達との円滑なコミュニケーションを支えている可能性がある。言い換えれば、みんな一緒に求める保育の中でも、遊びに自然に没頭できる環境や時間が確保されていることで、他者とも積極的に関わる事ができているのではないだろうか。

## 4. 総合考察と課題

### 4.1 総合考察

本研究では、3名の外国籍の子どもたちが、どのように幼稚園の生活に馴染んでいるのかを明らかにしてきた。結果のように外国籍の子どもたちが A 園での生活に馴染んでいく様子は、三者三様であったといえる。さらに各々が園生活に馴染めている部分もある一方、馴染みにくい部分もあったといえる。本研究の分析を踏まえると、園へ「馴染む」ことの背景には、次の 3 点が関連していると考えられる。

1 つ目は、研究協力園である A 園の保育の雰囲気である。A 園は日本の伝統的な公立幼稚園であり、設定保育の時間にはクラス全員で活動をしたり、行事に向けて歌の練習をするなど、「みんな一緒に求める」場面が度々みられた。これは日本の保育・教育現場では見慣れた光景であるが、外国籍の子どもからすると、B くんのように、みんなに合わせることに戸惑いを覚えたり、A くんのように、一緒に活動する時間と自由に遊ぶ時間の区別がつきにくいこともあると考えられる。日本では当たり前となっている保育が、異なる文化的視点では、馴染みにくさを生み出す可能性があること示唆しているといえるだろう。

2 つ目は、保育者や他児との関わりである。今回の観察対象であった 3 名の外国籍の子どもは、保育者や他児と積極的にかかわろうとし、反対に、保育者や他児も外国籍の子どもたちと積極的にコミュニケーションをとっていた。これは、普段の園生活のなかで関係づくりができているからこそ、観察者が入った際にも、

外国籍の子どもがクラスの中に自然に溶け込んでいる様子を見ることができたのだと考えられる。外国籍の子どもが否かにかかわらず、一人一人の子どものありのままを認めようとするA園の保育者の姿勢が、外国籍の子どもと保育者の間、子どもたちの間の受容的な関係を形成していると考えられる。

3つ目は、遊びの環境である。3名の外国籍の子どものうち、特にBくんはサッカーに、Cちゃんは製作活動に没頭する様子がみられた。このように個々の子どもが興味のある遊びに、のびのびと取り組むことのできる環境を整えることは、外国籍の子どもが園生活に楽しく参加するうえで非常に重要だと考えられる。観察のなかでAくんは、他の子どもが気になって遊びに集中できない様子もみられたが、そうした際にも保育者は、Aくんに過剰に介入せず、あたたかく見守る姿勢を保っていた。このような保育者の見守る姿勢は、子どもたちが個々のペースで園に馴染めるような環境づくりに繋がっていると考えられる。

なお、本研究は観察者が作成したフィールドノーツをもとに分析してきた。主な観察者は中国人留学生であり、観察者がもつ文化的立場をもとに、子どもたちを観察し、記録している。それは観察者が外国の文化性をもつからこそ、日本の保育現場を異なる視点からみて、気づけることがある一方で、反対にみえにくいこと、気づきにくいことがあることにも留意が必要だろう。また本研究は、うえの式質的分析を用いてきたが、うえの式質的分析法は基本的にインタビューデータの分析に用いられる手法であるが、本研究では観察データもうえの式での分析が可能であることを示した点に意義があるといえる。

#### 4.2 課題

最後に本研究の課題である。本研究ではフィールドノーツのうえの式質的分析を通して、A園における外国籍の子どもの様相を描き出してきたが、そこで見出した特徴が、外国籍であることによってみられる特徴なのか、出身国の文化的背景によってみられる特徴なのか、あるいは個性によるものなのか、という点まで詳細に分析することはできなかった。今後、さらに長期間のフィールドノーツを分析したり、保育者へのインタビュー調査を実施するなどして、より詳細に検討することが望まれるだろう。また本研究では3名の観察記録をうえの式で分析してきた。実際に分析するなかで、複数人の記録を一つのストーリーテリングとして整理すると、文章の接続が難しくかったり、対象者の一人当たりの記述量が少なくなることもわかった。今後、うえの式質的分析でフィールドノーツを分析す

る際には、以上の課題を踏まえた工夫が求められるだろう。

#### 【引用文献】

- 浅川一二美・山内淳子 (2020) 「中国人5歳児の日本の幼稚園入園後の適応プロセス」『山梨学院短期大学研究紀要』第40号, pp.39-55.
- Coplan, R. J. (2000) Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed., pp.563-598). New York: Wiley.
- 黄琬茜・山名裕子・榊原知美・和田美香 (2018) 「多文化保育における幼児のこぼれ-5歳児のコードスイッチングに着目して-」『保育学研究』第56巻第3号, pp.174-185.
- 李如意・浜田麻里 (2021) 「中国人3歳児の幼稚園生活への適応-日本語発話の産出と母語使用に注目して-」『子どもの日本語教育研究』第4号, pp.43-62.
- 真嶋梨江・岡山万里・高橋敏之, 西山修 (2017) 「幼児の園への適応とその支援に関する文献展望」『岡山大学教師教育開発センター紀要』7巻, pp.41-50.
- 長江侑紀 (2023) 「異年齢保育を基盤とした多文化保育の可能性と課題-文化的多様性のある保育現場のエスノグラフィー-」『保育学研究』第61巻第2号, pp.125-136.
- 中坪史典・上松由美子・朴恩美・山元隆春・財満由美子・林よしえ・松本信吾・落合さゆり (2010) 「遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究: 幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討」『広島大学学部・附属学校共同研究機構』38, pp.105-110.
- 大内晶子・桜井茂男 (2005) 「就学前児における非社会的遊びと社会的適応との関連」『筑波大学心理学研究』第30巻, pp.51-61.
- 大野和男 (2010) 「入園からクラス替えに至る幼稚園児の様子: 保育者の視点から見たクラスに『なじむ』ことと子どもの発達」『松本短期大学紀要』19巻, pp.3-14.
- 佐々木由美子 (2015) 「外国籍保育士による支援が外国籍児の保育園適応に及ぼす心理的効果に関する質的研究」『子育て研究』第5巻, pp.21-29.
- 品川ひろみ (2011) 「多文化保育における保育者の意識-日系ブラジル人児童の保育を中心として-」『現代社会学研究』第24巻, pp.23-42.
- 柴山真琴 (2006) 『子どもエスノグラフィー入門: 技



公立 A 幼稚園において外国籍の 3 人の子どもはどのように園生活に馴染んでいるのか  
—うえの式質的分析法によるフィールドノーツの分析をもとに—

法の基礎から活用まで』, 新曜社  
田窪みゆり・掘越紀香 (2012) 「幼稚園児における  
ひとり行動の変容と意味—3 歳児と 5 歳児との比  
較—」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第 34 卷  
第 2 号, pp.223-236.  
上野千鶴子監修・一宮茂子・茶園敏美編 (2017) 「語  
りの分析〈すぐに使える〉うえの式質的分析法の実

践』, 『生存学研究センター報告』, 27, 立命館大学  
生存学研究センター  
上野千鶴子 (2018) 『情報生産者になる』, ちくま新書

**【付記】**

本研究は JSPS 科研費 23K17617 を受けたものです。